鶴来北部遺跡群調査報告Ⅱ

－県営圃場整備事業鶴来地区埋蔵文化財発掘報告２－

１９９５年３月

石川県立埋蔵文化財センター

鶴来北部遺跡群調査報告Ⅱ

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は県営ほ場整備事業鶴来地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の第２分冊であり、石川県石川郡鶴来町に所在する熱野(ねつの)遺跡、柴(しばき)木Ｄ遺跡、新荒屋(しんあらや)遺跡の報告を行なっている。

2　上記３遺跡の発掘調査は、石川県農林水産部耕地整備課（現在は農地整備課）の依頼を受け、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。

3　現地調査及び資料整理、報告書刊行に係る費用は、一部文化庁から補助金を得た他は耕地整備課が負担した。

4　現地調査の実施から報告書の刊行に至るまでには下記の関係機関の協力を得ている。
文化庁記念物課、石川県農林水産部耕地整備課、石川県松任土地改良事務所、鶴来町教育委員会

5　現地調査及び資料整理に際しては、下記の方々の協力を得ている。
浅野豊子、大藪智子、田畑　弘、藤重　啓、前田雪恵、松田英博（五十音順、敬称略）

6　出土遺物の写真撮影・写真図版の作成は各遺跡調査担当者が行った。

7　本報告書の執筆は、第１章・第３章を川畑　誠、第２章を三浦純夫、第４章を安　英樹が、それぞれ分担して行った。編集は三浦、川畑と協議の上、安が行った。なお、遺跡の位置と周辺の環境については第１分冊に記載しているので参照されたい。

8　本文・図版・挿図についての凡例は下記の通りである。
(1)遺跡名について一部改称したものがあり、詳細は第４章に記した。(2)方位は全て真北を指し、水平基準は海抜高である。(3)挿図の縮尺は図内に示した。(4)図版の出土遺物の縮尺は不同である。(5)出土遺物番号は挿図・図版で共通する。(6)遺物挿図の須恵器実測図は断面を黒塗りしている。

9　発掘調査で得られた記録資料、出土遺物は石川県立埋蔵文化財センターで保管している。

本　文　目　次

報告書抄録

第１章　序　章 ……（川畑）…… 1

第２章　熱野遺跡の調査 ……（三浦）…… 3

第１節　調査の概要

第２節　遺構と遺物

第３章　柴木Ｄ遺跡の調査 ……（川畑）…… 5

第１節　調査の概要

第２節　遺構と遺物

第３節　小結

第４章　新荒屋遺跡の調査 ……（安）…… 9

第１節　調査の概要

第２節　遺構

第３節　遺物

第４節　小結

図　版　目　次

熱野遺跡

図版１上　遺跡遠景（西から）

図版１下　第１区完掘状況（北から）

図版２上　第２区完掘状況（西から）

図版２下　出土遺物

柴木Ｄ遺跡

図版３上　表土除去作業

図版３下　作業風景

図版４上　１区完掘状況（西から）

図版４下　２区完掘状況（北から）

図版５上　１区１号溝完掘状況（西から）

図版５中　１区１号溝北壁土層（南から）

図版５下　１区完掘状況（東から）

図版６上　２区１号土坑（南から）

図版６中　２区１号土坑土層（南西から）

図版６下　２区１号溝（東から）

新荒屋遺跡

図版７上　１号土坑（西から）

図版７下　２号土坑（北から）

図版８上　３号土坑（西から）

図版８下　溝（東から）

図版９上　ピット１～５（南から）

図版９下　ピット１～５（西から）

図版10上　ピット５（南から）

図版10下　１～３区全景（南から）

図版11上　４～11区全景（北から）

図版11下　トレンチ１（南から）

図版12上　トレンチ２（南から）

図版12下　トレンチ３（南から）

図版13上　調査区全景（北から）

図版13下　調査区全景（南から）

図版14　出土遺物

報告書抄録

ふ り が な	つるぎほくぶいせきぐんちょうさほうこくに
書 名	鶴来北部遺跡群調査報告Ⅱ
副 書 名	県営圃場整備事業鶴来地区埋蔵文化財発掘報告
巻 次	2
シ リ ー ズ 名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	川畑　誠、三浦純夫、安　英樹
編 集 機 関	石川県立埋蔵文化財センター
所 在 地	石川県金沢市米泉町４丁目133番地　　TEL 0762－43－7692
発 行 年 月 日	平成７年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
熱野遺跡 (ねつのいせき)	石川県石川郡 (いしかわけんいしかわぐん) 鶴来町熱野町地内 (つるぎまちねつのちょうちない)	17343	012	36° 29′ 30″	136° 36′ 54″	19901029～ 1101	100	県営ほ場整備事業 鶴来地区熱野工区
柴木Ｄ遺跡 (しばきいせき)	石川県石川郡 (いしかわけんいしかわぐん) 鶴来町柴木町地内 (つるぎまちしばきちょうちない)	17343	006	36° 29′ 18″	136° 36′ 10″	19910708～ 0710	120	県営ほ場整備事業 鶴来地区柴木工区
新荒屋遺跡 (しんあらやいせき)	石川県石川郡 (いしかわけんいしかわぐん) 鶴来町部入道町、 (つるぎまちぶにゅうどうちょう) 新荒屋町地内 (しんあらやちょうちない)	17343	011	36° 29′ 23″	136° 36′ 34″	19911011～ 1030	216	県営ほ場整備事業 鶴来地区部入道工区

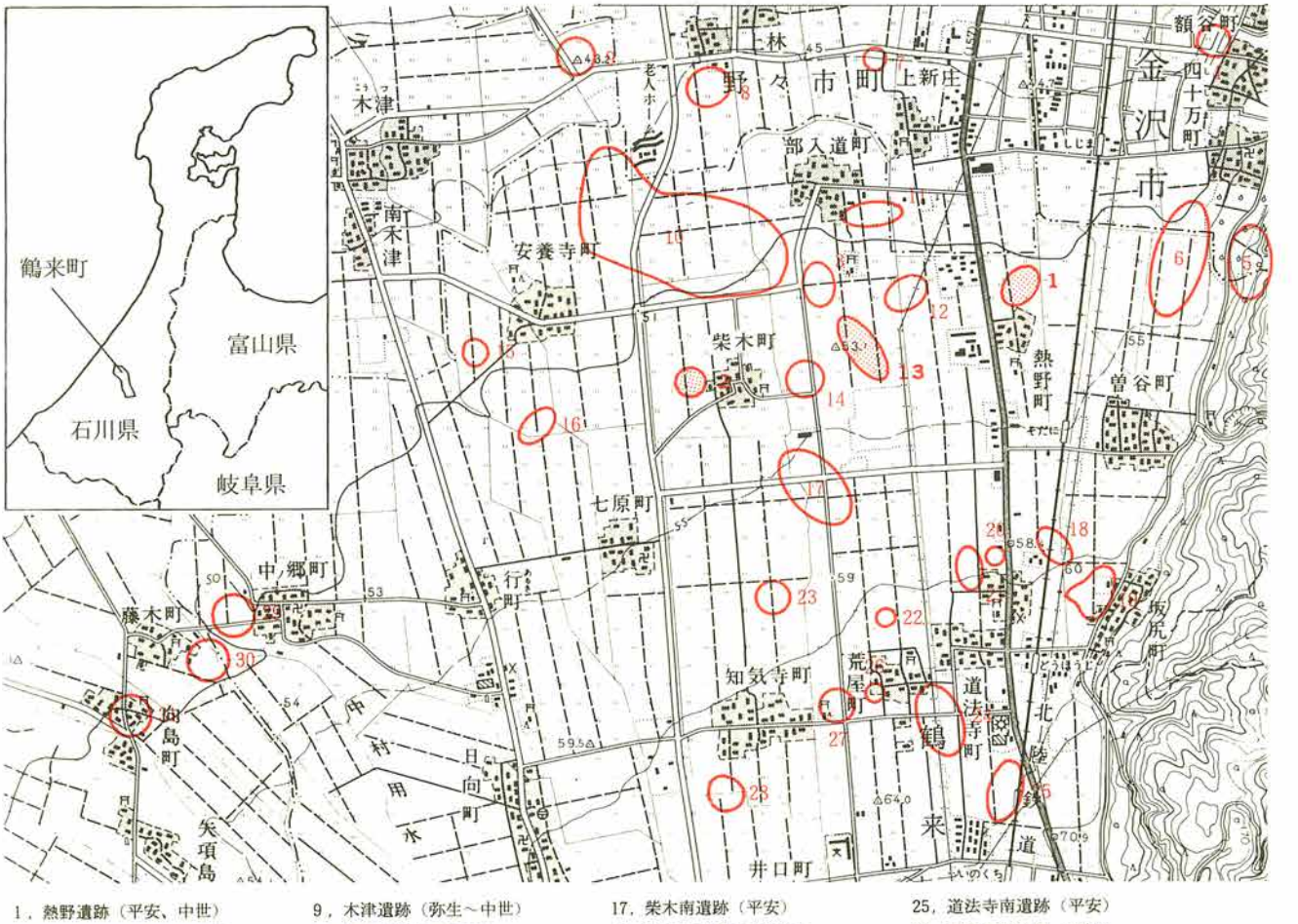
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
熱野遺跡	散布地か 集落遺跡	奈良・平安時代	溝２条 ピット２基	土師器、須恵器	古代集落遺跡の縁辺部と推定される。
柴木Ｄ遺跡	散布地か 集落遺跡	平安時代、中世	土坑１基 溝２条	土師器、須恵器、 陶磁器	古代と中世の複合集落遺跡の縁辺部と推定される。
新荒屋遺跡	散布地か 集落遺跡	奈良・平安時代	土坑３基 溝１条 ピット６基	土師器、須恵器	古代集落遺跡の縁辺部と推定される。部分的にであるが、上位の遺構面とピット列が確認されており、複合遺跡の可能性もある。

第1章　序　章

本書に報告する熱野遺跡、柴木D遺跡、新荒屋遺跡の発掘調査は、石川県農林水産部耕地整備課、石川県松任土地改良事務所主管の県営ほ場整備事業鶴来地区に係るものである。同事業は、石川郡鶴来町北部に位置する水田に対し、区画の大型化および用排水路の分離と農道整備を行うことで、農業経営の近代化と農村環境の改善をはかることを目的に、計画策定がなされた。

石川県立埋蔵文化財センターでは、県営ほ場整備事業に関する埋蔵文化財について、事前の分布調査により埋蔵文化財の有無および範囲の確定を行うとともに、事業区域内に存在する埋蔵文化財に対して保護措置を講ずるよう関係機関と協議を進めてきた。そして、やむをえず埋蔵文化財の保護に影響を生ずる箇所については発掘調査を実施することで対応してきた。

平成2、3年度施工の同地区熱野、柴木、部入道の各工区についても、平成元年度秋に熱野工区、柴木工区、平成2年度秋に部入道工区に対して分布調査を実施、その都度県耕地整備課に回答を行っている。その回答をもとに、関係機関と協議した結果、水田面の工事にかかる部分は盛土施工で埋蔵文化財の保護をはかること、排水路部分等の掘削により埋蔵文化財が破壊される部分は県立埋蔵文化財センターが発掘調査をおこなうことが決定



1．熱野遺跡（平安、中世）
2．柴木D遺跡（平安、中世）
3．部入道B遺跡（奈良、平安）
4．四十万B遺跡（平安、中世）
5．四十万ヒッカジ遺跡（奈良、平安）
6．四十万南遺跡（奈良～中世）
7．上新庄ニシウラ遺跡（古墳、奈良）
8．上林遺跡（弥生、平安）
9．木津遺跡（弥生～中世）
10．安養寺遺跡（平安）
11．部入道A遺跡（奈良、平安）
12．部入道C遺跡（奈良、平安）
13．新荒屋遺跡（奈良、平安）
14．柴木東遺跡（奈良、平安）
15．安養寺B遺跡（平安）
16．安養寺C遺跡（平安）
17．柴木南遺跡（平安）
18．道法寺B遺跡（奈良）
19．坂尻遺跡（奈良、平安）
20．道法寺C遺跡（平安）
21．道法寺遺跡（平安）
22．荒屋B遺跡（弥生）
23．知気寺B遺跡（平安）
24．荒屋遺跡（縄文～古墳）
25．道法寺南遺跡（平安）
26．荒屋集落遺跡（平安）
27．知気寺遺跡（平安）
28．井口B遺跡（不詳）
29．来同本覚寺跡（中世）
30．園ノ道観館跡（不詳）
31．林四郎左エ門館跡（不詳）

第1図　調査区周辺の遺跡（1／25,000）

第２図　調査区の位置（１／10,000）

した。そして熱野工区では平成２年10月29日～11月１日にかけて熱野遺跡（約100㎡）、柴木工区では平成３年７月８日～７月10日にかけて柴木Ｄ遺跡（約120㎡）、部入道工区では平成３年10月11日～10月30日にかけて新荒屋遺跡（約216㎡）に対して、それぞれ発掘調査を実施した。以下、調査参加者（所属は調査当時）を記す。なお、周辺遺跡の状況に関しては、第１分冊に掲載されているので、ご参照願いたい。

熱野遺跡

調　査　員　三浦純夫（調査第一課）

調査補助員　藤重　啓

柴木Ｄ遺跡

調　査　員　中島俊一、川畑　誠（調査第一課）

調査補助員　田畑　弘、松田英博

新荒屋遺跡

調　査　員　垣内光次郎、安　英樹（調査第一課）

調査補助員　松田英博

作　業　員　岩岸正次、岩岸政泰、大田和子、大田重信、大田静枝、大田住子、大田多美子、水本外代子

第２章　熱野遺跡の調査

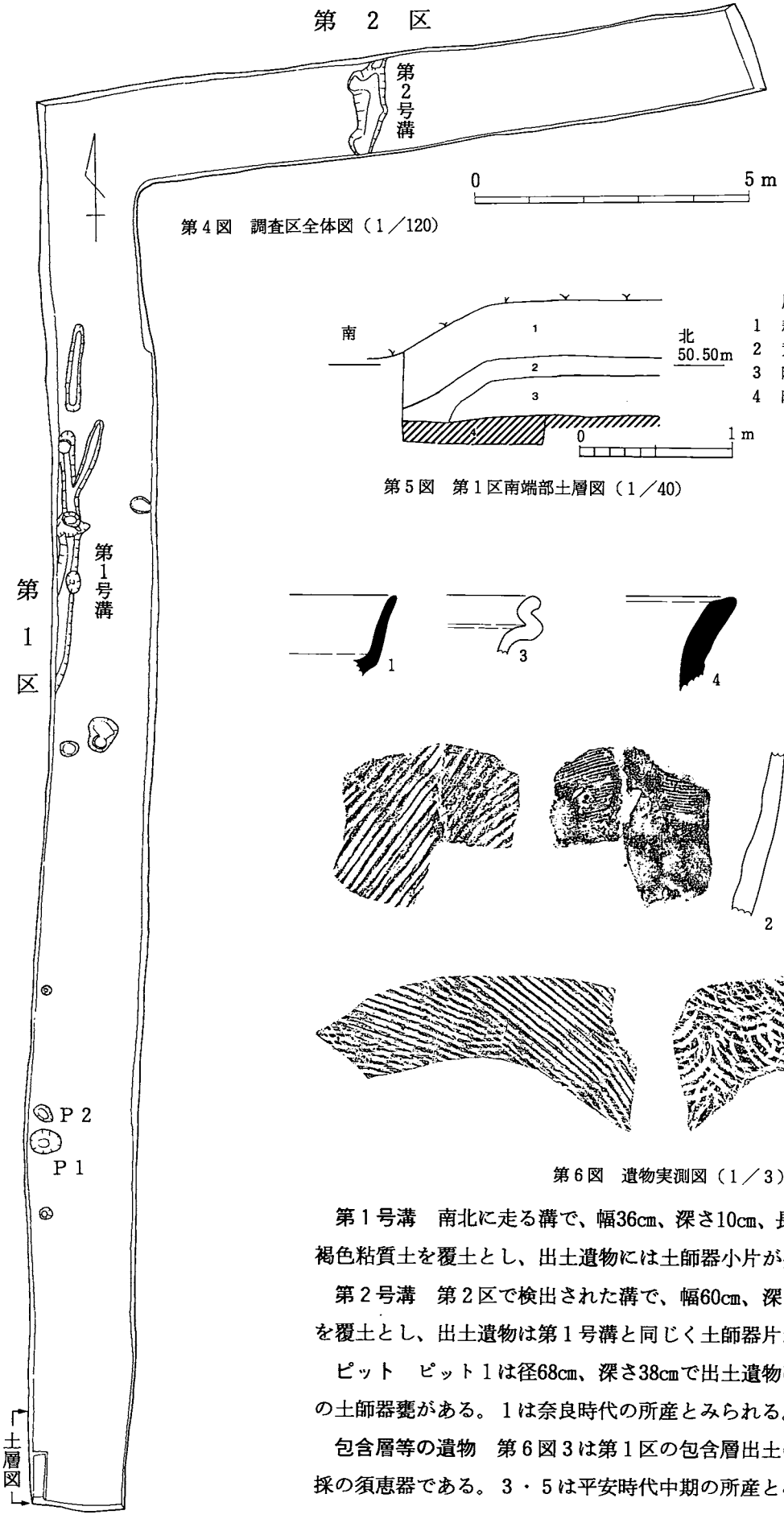
第１節　調査の概要（第３図、図版１）

本遺跡は石川郡鶴来町熱野町地内に所在する。調査は県営ほ場整備事業鶴来地区熱野工区に係るもので、平成元年度の分布調査の結果をうけて、同２年度に実施した。現地調査は平成２年10月29日から同年11月１日まで行った。分布調査によって熱野集落北部に遺跡の広がりが認められたので、これにかかる排水路部分を幅２ｍ、長さ40ｍにわたって調査した。なお、集落寄りの約30ｍは現況水路を利用するため調査の対象とはしなかった。

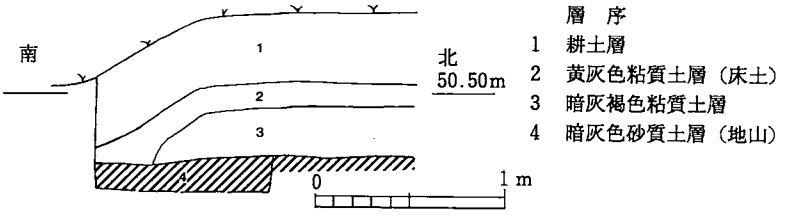
第２節　遺構と遺物（第４図～第６図、図版１・２）

検出した遺構には２条の溝と若干のピットがある。出土遺物は約20点で、採集遺物が10点ある。いずれも小片で、図示しえたものはわずかである。層序は第３図に示したものが基本であるが、調査区南端部以外はすでにほ場整備の工事による削平と客土がみられ、第３層が10～20㎝の厚さで残るのみである。

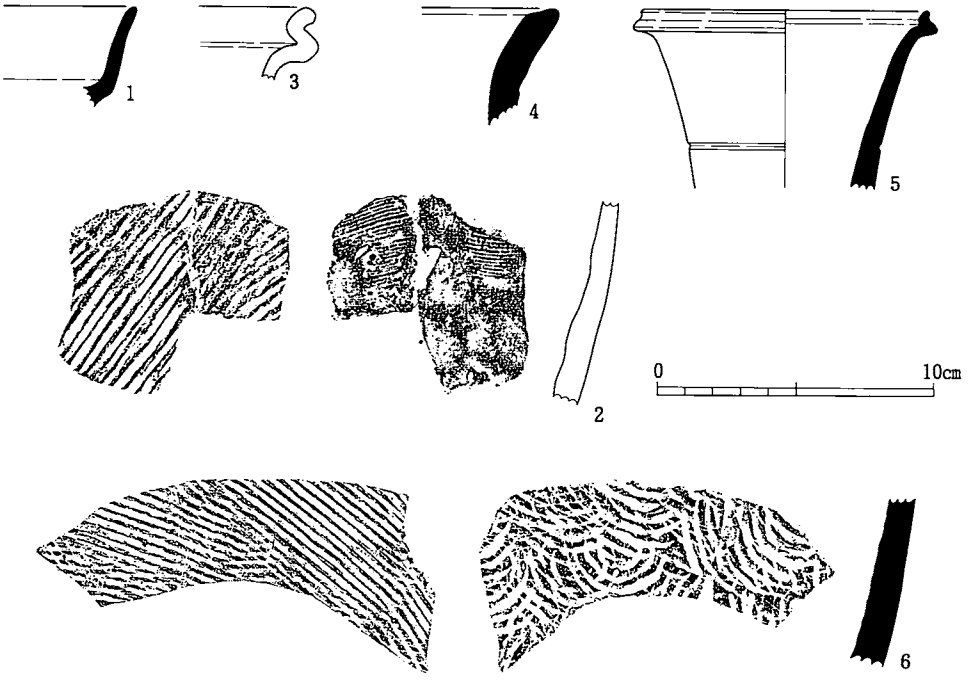
第３図　調査区の位置（１／2,000）



第４図　調査区全体図（１／120）



第５図　第１区南端部土層図（１／40）



第６図　遺物実測図（１／３）

第１号溝　南北に走る溝で、幅36cm、深さ10cm、長さは現状で6.8mを測る。茶褐色粘質土を覆土とし、出土遺物には土師器小片が少量ある。

第２号溝　第２区で検出された溝で、幅60cm、深さ15cmを測る。灰褐色砂質土を覆土とし、出土遺物は第１号溝と同じく土師器片が少量ある。

ピット　ピット１は径68cm、深さ38cmで出土遺物には第６図１の須恵器杯と２の土師器甕がある。１は奈良時代の所産とみられる。

包含層等の遺物　第６図３は第１区の包含層出土の土師器である。４～６は表採の須恵器である。３・５は平安時代中期の所産とみられる。

第３章　柴木Ｄ遺跡の調査

第１節　調査の概要

柴木工区に係る柴木Ｄ遺跡の発掘調査は、石川郡鶴来町字柴木町の西側に隣接して敷設される排水路部分（長さ約60m）を対象に、平成３年７月８日～７月10日にかけて実施した。調査は、調査第一課中島俊一、川畑　誠が担当し、調査補助員田畑　弘、松田英博が補佐した。

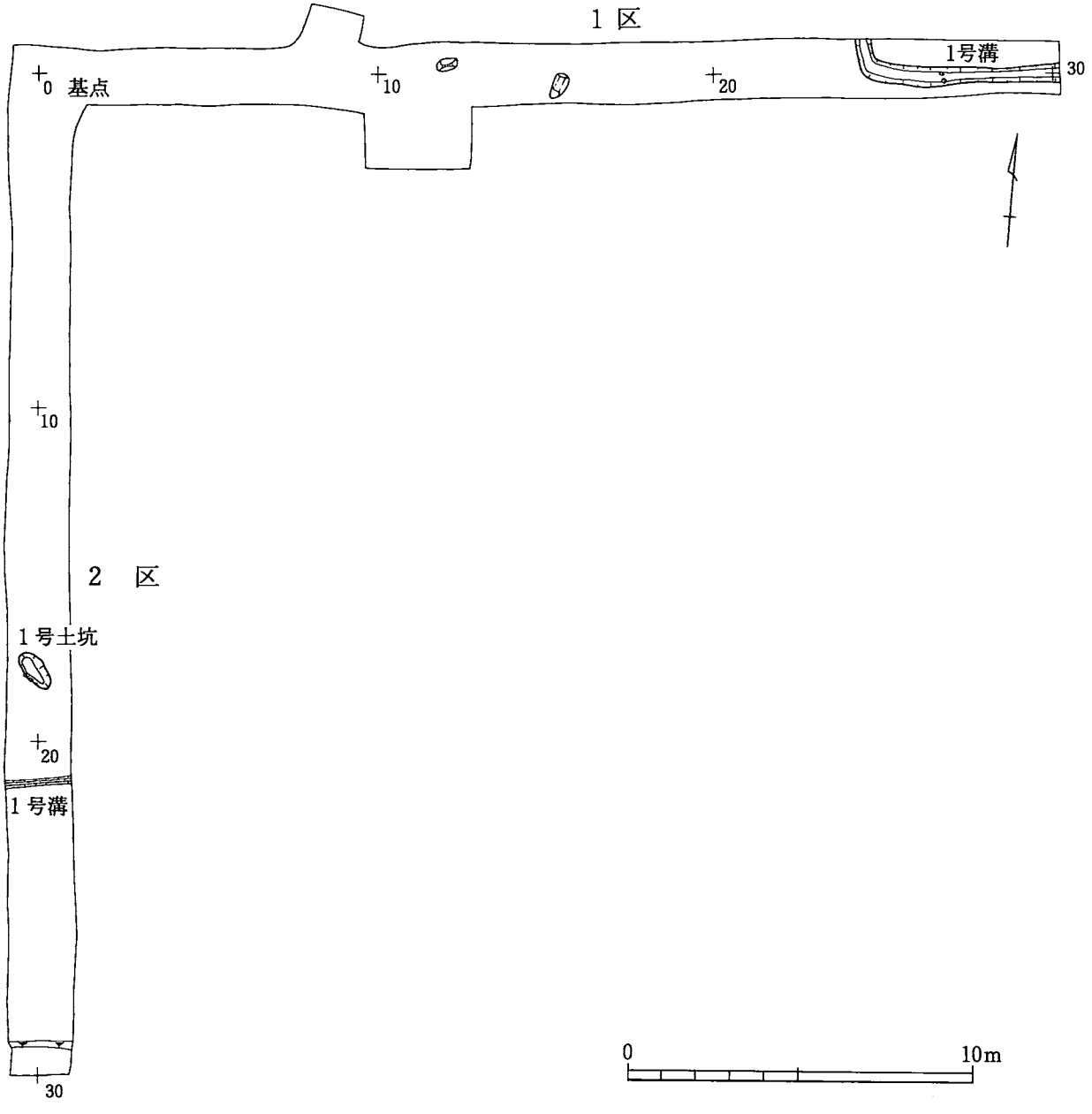
調査区周辺は、県下最大の手取川扇状地（扇径約12km、扇角約110度）の扇央部北東側に位置し、北側および西側に向けてゆるやかな傾斜を示す。調査区の旧水田面で、標高52mを測る。

調査区は、第８図に示したとおり起点を排水路中心線が直角に屈曲する地点に設定、主軸線は排水路中心線と一致する。そして、起点より東側にのびる部分を１区（長さ約30m、幅約２m）、起点より南側にのびる部分を２区（長さ約30m、幅約２m）と区別している。

基本土層層序は、１区では北壁で、２区では西壁で観察した。土層層序の概要は、第９図に示したとおり、上層から３面の耕作土および床土と考えられる土層の堆積（土層１～６）、古代、中世の包含層となる淡灰褐色粘質土（土層７）、手取川扇状地に通有のベース土（濁灰色粘質土混じりの砂礫土）となる。ただし、ベース面のあがる１区東側および２区南側では第５、６層は確認できない。遺構検出面での標高は１区東端で約51.4m、起点付近で51.2m、２区南端で51.5mを測り、地表面と同様な傾斜を示す。また、土層５からは近世以降の染め付け小片が出土し、３回の耕作面の形成された時代を考える一つの定点となる。

調査の結果、１区で直角に屈曲する溝１条、２区で溝１条、土坑１基を検出したが、出土遺物が少なく、存続時期を推測できる遺構は、２区１号溝のみである。また包含層からは、わずかに平安時代前期の須恵器杯小片、土師器甕小片、中世後半の陶磁器小片が出土したにとどまり、図化可能な個体は存在しなかった。

第７図　調査区の位置（１／3,000）



第 8 図　調査区全体図（1/200）

なお、本遺跡は今回の事業に係る分布調査で新たに発見された遺跡で、調査区起点付近を中心として北東方向に径約50m、南東方向に径約40mのひろがりをもった、小規模な古代、中世の集落遺跡と想定される。

第 2 節　遺構と遺物

1 区 1 号溝（第10図、図版 5）

24～30m付近で検出され、24m付近で調査区に直交して屈曲する。北壁土層断面で上幅約90cm、下幅約25cm、深さ約30cmを測る。基本土層層序第 3 層をベース面とすることから、新しい時代の遺構と考えられる。覆土はやや粘性を帯びた灰色粘質土の単層である。出土遺物はない。

2 区 1 号溝（第10図、図版 6）

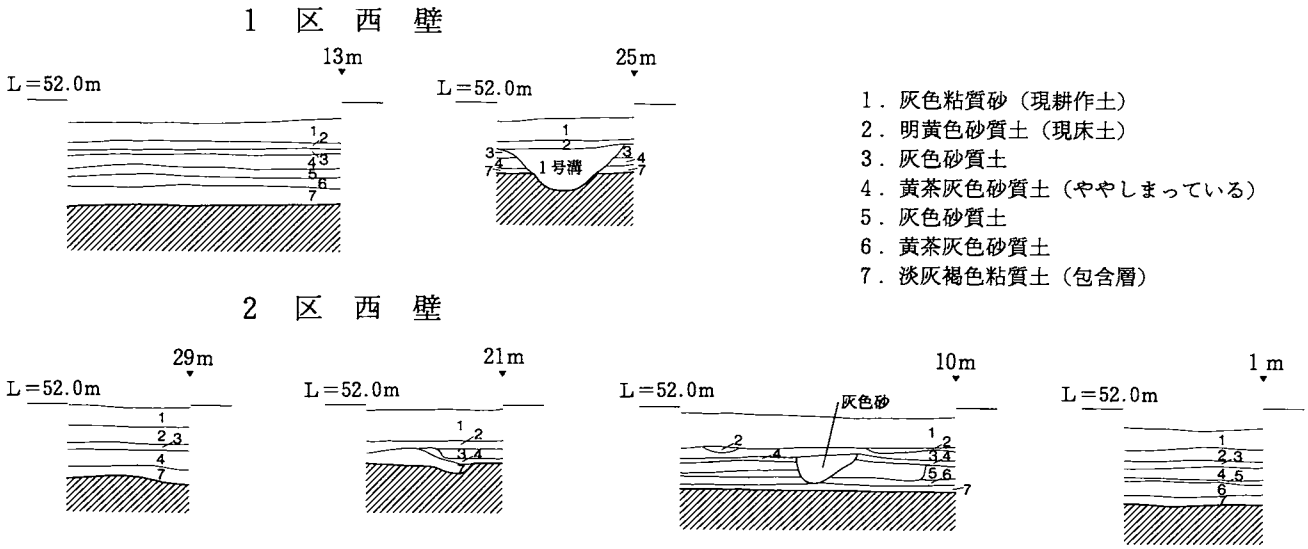
21m付近で検出され、調査区に直交して流れる。検出面で幅20～25cm、深さ約 5 cmを測る。覆土は包含層と同質の淡灰褐色粘質土の単層である。覆土より図化できなかったが、中世後半以降の鉄釉天目茶碗細片が出土した。

2区1号土坑（第10図、図版6）

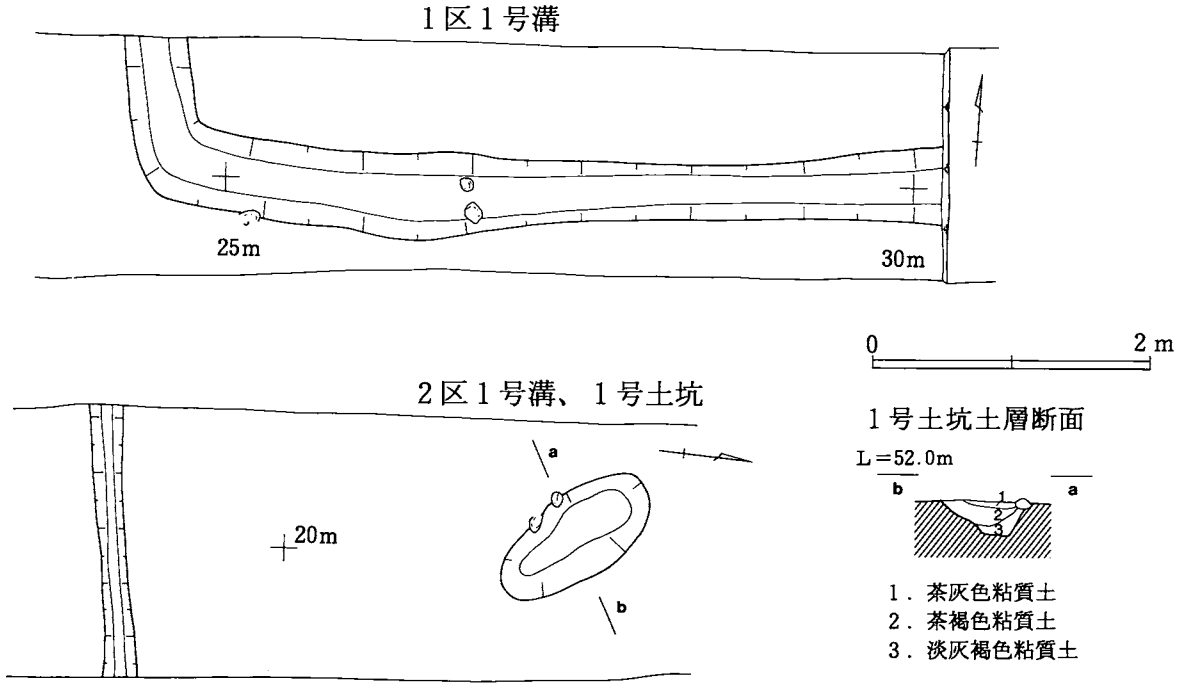
18m付近で検出され、北西一南東方向に主軸をもつ。やや崩れた楕円形を呈し、検出面で長軸約130cm、短軸約60cm、深さ約24cmを測る。覆土は上層より、茶灰色粘質土、茶褐色粘質土、淡茶褐色粘質土である。出土遺物はなく、また性格も不明である。

その他

1区12～15m付近の2箇所で、平坦面をもつ60～80cm大の自然石を確認した。礎石建物の土台石を想定し、主軸方向と考えられる方向に対して調査区を一部拡張するとともに、掘方の検出調査を実施した。拡張部分では自然石は存在せず、また掘方も検出できなかったことから地山中の自然石と判断した。



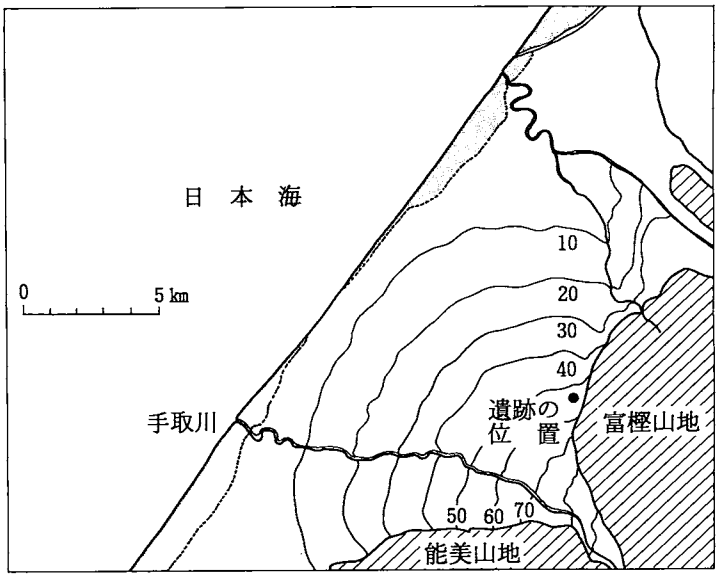
第9図　土層観察図（1／60）



第10図　遺構実測図（1／60）

第3節　小　結

今回の調査では遺構、遺物とも少なく、本遺跡の性格に関して言及できる部分はほとんどない。そのため、本遺跡の位置する手取川扇状地の集落遺跡の動向との対比の中で、本遺跡を位置付けることで小結にかえたい。



第11図　手取川扇状地の地形と遺跡の位置

手取川扇状地の7～10世紀の開発は、遺跡数や分布状況から4回の大きな画期を経ていることが明らかとなっている。第1の画期は7世紀後半（末葉に顕在化）にある。これは、古墳時代以降に扇端部（おおむね標高10m以下）および富樫山地からのびる低丘陵で継起的に存続していた集落遺跡の集中地帯の移動としてあらわれる。扇端部では集落遺跡が急減する一方、それまでほとんど空白地帯だった扇央部下半（おおむね標高10～30m、弥生以降の集落遺跡は点的に存在する）で新たな遺跡が点在的に多数成立、結果として集落遺跡の中心域の大規模な移動と拡散的分布状況を呈するようになる。また本遺跡周辺の扇央部上半（おおむね標高30～60m、弥生以降の集落遺跡は少ない）では、中心域の移動の顕著な状況はみられないが、末松廃寺建立で端的に示されるような扇央部下半と同質の動きに包括できると考えられる。第2の画期は8世紀中頃にある。これは第1の画期で成立をみた扇央部の集落遺跡を中核とするように遺跡数が増加傾向を示し、隆盛を迎える。第3の画期は9世紀中葉にあり、前期でピークに達した集落遺跡数に変動があらわれる。扇央部下半では集落遺跡が一斉に衰退、消滅過程に入り、北安田北遺跡例のような6世紀末～7世紀初頭以降のそれぞれの小地域の中核的遺跡のみが存続するようだ。一方、扇央部上半では第1図のとおり、従来からの集落遺跡に加え、11世紀中頃まで存続する安養寺遺跡群を中核とするように、極めて小規模な遺跡が衛星的に多数成立、扇央部下半とは好対照をなす。第4の画期は10世紀前半～中頃にあり、扇央部一帯で集落遺跡数が減少過程に入ると考えられるが、その状況は不明である。このような中で、本遺跡は扇央部上半の第3、4の画期に包括される動きを示す。

さて、このような集落遺跡の消長の背景について、第1の画期は浅香年木氏の論ずるように「遅滞していた手取扇状地開発の一応の拡大は、潅漑技術を含む勧農機能の国家権力による集中的な把握体制の確立」をもって著しく進捗したと説明できよう。第2の画期は、県下全域で認められる軌を一にした律令国家全般の動きで説明できよう。第3の画期は、律令国家の変質、再編にかかわるものと考えられる。その具体像は不明瞭だが、本遺跡を含む扇央部上半と同様に9世紀中頃以降に集落遺跡の増加・集中傾向を示す地域としては、現在の金沢市内金沢港周辺の低地地帯と小松市梯川流域があげられる。このいずれもが、加賀国府比定候補地となっており、律令国家の影響が強く及んだ地域と考えられている。また浅香年木氏は、やや時代が下るものの石川郡内での集中的な国衙領の残存は、「富豪層・有力田堵層など」が「むしろ、国衙機構に依存し、その公権を支えに既墾地の再開発と安定化を推進するコースに重点」をおいた結果と論じており、やはり扇央部上半は国衙の影響を強く受けた地域と考えている。このようなことから、現時点では本遺跡も律令国家の強い影響を受けて再編された扇状地上半の集落群の一部を構成していたと位置付けられる。今後さらに在地有力者層の自立性や白山信仰の本格化などを視野に入れながら、本地域の様相を明らかにする必要があろう。

引用文献

浅香年木「後論　平安期における手取扇状地の開発と領主」『加賀三浦遺跡の研究』石川考古学研究会 石川県金沢市 1967年

第４章　新荒屋遺跡の調査

第１節　調査の概要

県営ほ場整備事業鶴来地区部入道工区では、平成２年度に行った埋蔵文化財分布調査によって３箇所に遺跡が確認された。確認された遺跡は工区の東側では部入道Ｃ遺跡（県遺跡№15010）と新荒屋遺跡（№15011）、西側で部入道Ｂ遺跡（№15009）である。遺跡の保護については、田面工事に対しては盛土工法で保存が可能であるが、遺跡の範囲内における排水路敷設箇所は事前の発掘調査による記録保存が不可避と判断された。工区東側の排水路敷設箇所は部入道Ｃ遺跡及び新荒屋遺跡のほぼ中間に位置しているため、どちらの遺跡の範囲となるのか明確でなかったが、仮に部入道Ｃ遺跡として調査を進めた。工区の西側の排水路敷設箇所については部入道Ｂ遺跡の範囲内に位置するが、遺跡の遺存状態が悪かったため、工事立ち会いを実施した。

発掘調査は、工区の東側で、南北方向に走る排水路を敷設する区域が対象になった。調査面積は掘削幅２ｍで延長約108ｍの約216㎡を測る。調査区は水路のセンターを調査区の主軸とし、北から10ｍ毎に１～11区まで区割りを行った。ただし11区は８ｍ程度の全長になる。調査区の主軸はＮ―6.5°―Ｗを指す。

遺跡の基本的な層序がよく捉えられるのは１～８区で、上位から耕作土、遺物包含層、ベース土となる。１～８区では耕作土下に鉄分沈着層がよく見られる。遺物包含層は黄灰～暗灰色の粘土か砂質土であるが、遺物の含みは少ない。ベース土は少し礫を含む黄灰色砂質土を基本とするが、４区34ｍ～５区42ｍでは砂礫層となる。９～11区では遺物包含層は見られなくなり、耕作土の直下が砂礫層となる。ベース面の標高は１区で約50ｍ、７区で約51ｍ、11区で約51.5ｍを測り、北から南に向かって緩やかに上昇しており、手取川扇状地扇央部の微地形

第12図　調査区位置図（１／3,000）

が窺われる。遺構は土坑３基、溝１条、ピット６基を検出した。遺物は包含層を中心にパンケース１箱程度の土師器、須恵器が出土した。確認のため、調査区の０ｍ、40ｍ、80ｍ地点から東へ２ｍの間隔をおいて調査区外にトレンチ１～３を設定し掘削したが、状況は同じであった。遺構・遺物は全般に希薄な分布状況と言える。

部入道Ｂ遺跡の工事立ち会いでは土師器、須恵器小破片が出土した。遺構は確認されなかった。

調査の終了後、石川県遺跡地図の改訂が行われ、その際、調査区は新荒屋遺跡に含まれるものと判断されたので、本書では新荒屋遺跡として報告する。しかし資料の整理は調査時の遺跡名である、部入道Ｃ遺跡として改訂に先行して作業を進めたので、調査資料の記名は全て「部入道Ｃ遺跡」となっており、注意されたい。

第２節　遺　構

１号土坑（図版７、土層第14図）

６区に位置する。半掘したのみで全形は不明。隅部分は丸みを持ち、底面は比較的フラットである。長径約2.2ｍ、深さ10～16cmを測る。覆土は単層、暗灰褐色砂質土である。遺物は土師器、須恵器の小破片が出土した。

２号土坑（図版７、土層第14図）

６区に位置する。半掘したのみで全形は不明。南部のプランが不整であるが、長径は約3.3ｍに達する。底面は比較的フラットで深さは30cmを前後するが、南側では約17cmと浅くなり凹、凸が見られる。遺構の南部は攪乱されているようである。覆土は単層、濁灰褐色粘質土である。遺物は土師器、須恵器の小破片が出土した。

３号土坑（図版８）

８区に位置する。半掘したのみで全形は不明。ベース土となる砂質土層を掘り抜いたようであり、底面には礫が露出している。長径約1.5ｍ、深さ11～14cmを測る。覆土は不明である。遺物は出土していない。

溝（図版８、土層第14図）

３区に位置する。東西方向に走る溝の西端と思われるが、その東部は調査区外へ伸びており、全形は不明である。土坑の可能性もある。角のない緩やかなラインで結ばれる平面形で、２段に掘り込まれており、上段幅約90cm、下段幅約55cm、深さ下段まで約５cm、溝底まで約20cmを測る。覆土は単層、遺物包含層と同一で、礫混じりの灰褐色砂質土である。遺物は出土していない。

ピット（図版９・10）

ピット１～５は４区から５区、35ｍ～41ｍの砂礫層がベース土となる地点に集中しており、北から順に番号を振った。ピット１～５は遺物包含層の上面から掘り込まれており、この範囲についてはベース面よりも上位の遺構面及び遺構が存在する。全て全掘できており、ピット１～３・５は不整円形、ピット４は不整長方形である。ピット１は径約50cm、深さ約15cm。ピット２は径約30cm、深さ約19cm。ピット３は径約40cm、深さ約44cm。ピット４は長径約55cm、短径約25cm、深さ約７cm。ピット５は径30～35cm、深さ約45cm。覆土は全て灰色粘質土の単層である。ピット６は１区に位置する。半掘したのみで全形は不明、径約50cm、深さ約15cmを測る。覆土は不明である。ピット１～６から遺物は出土しなかった。

第３節　遺　物

包含層出土遺物（第15図１～15、図版14）

１は土師器で、椀と思われる。内面黒色仕上げ、外面回転ヘラ切りの底部で、底径は4.8cmとやや小振りである。２～15は須恵器で、色調は概ね灰色か明灰色である。２～６は無台の杯身、いわゆる杯Ａ。２は口縁部・底部境に回転ヘラケズリした面を取るもの。酸化焔焼成で、色調は淡橙灰色を呈する。３は口縁部・底部境が丸みを持つもの。底面に調整時の粘土塊が取り残されている。胎土は精良で、緻密な質感であるが、わずかに半透明の長石片が含まれる。４も底面に調整時の粘土塊が取り残されている。胎土中には粒径１～２mm大の長石が含まれ

る。5・6は口縁部の立ち上がりが直線的で、底部との境がはっきりしている。6は胎土に風化した白色の礫を大小多く含み、砂っぽい質感を持つ。7は杯蓋、8～11は有台杯身で、いわゆる杯Bである。7は口縁端部を面取りし、わずかに垂下している。頂部の回転ヘラケズリは明確でなく、大半はナデで仕上げたようである。胎土は細かい砂礫を多く含み砂っぽいが、大粒の長石片も見られる。8は外反する口縁部、内端で接地する幅広の重厚な高台を持つもので、径のわりに器高が低い、偏平な器形である。底面は回転ヘラケズリを行っている。胎土は大小の砂礫が多く含まれる。9・10は外方へ広がる薄い華奢な高台を持つもので、底面には不整方向のナデが加えられている。9・10の胎土は細かい砂礫を含むが、大粒の長石片も見られる。色調は9は明灰色、10は灰色と、やや異なる感じである。11は口縁部のみであるが、身の深い器形と思われる。胎土、色調とも10によく似るが同一個体かどうかはわからない。12は無台の盤、いわゆる盤Aである。完形ではないが、出土品中では全形を知り得る唯一の資料である。口径17cm、底径12cm、器高3cm程に復元される。口縁部は外傾して直線的に伸び、底部との境は丸みを持つ。胎土、質感とも3によく似る。13～15は瓶と思われる。13は胴部で、肩部に近い部位であり、強く屈曲する部分でちょうど折損している。14は底部に近い部位で、高台が剝落している。13・14とも焼成良好で黒色の吹出しが見られ、胎土は大小の砂礫が多く含まれる。器面の自然釉の流れ等も共通しており、13・14は同一個体の可能性が高い。内底面に自然釉が付着していることから広口の器形とわかり、台付の長頸瓶と推定できる。15は底部に近い部位で、下位に強い稜を持つが、よく器形がわからない。胎土は細かい砂礫を含むが、大粒の長石片も見られる。この他、小破片で図化できなかったが土師器甕、須恵器甕も定量出土している。

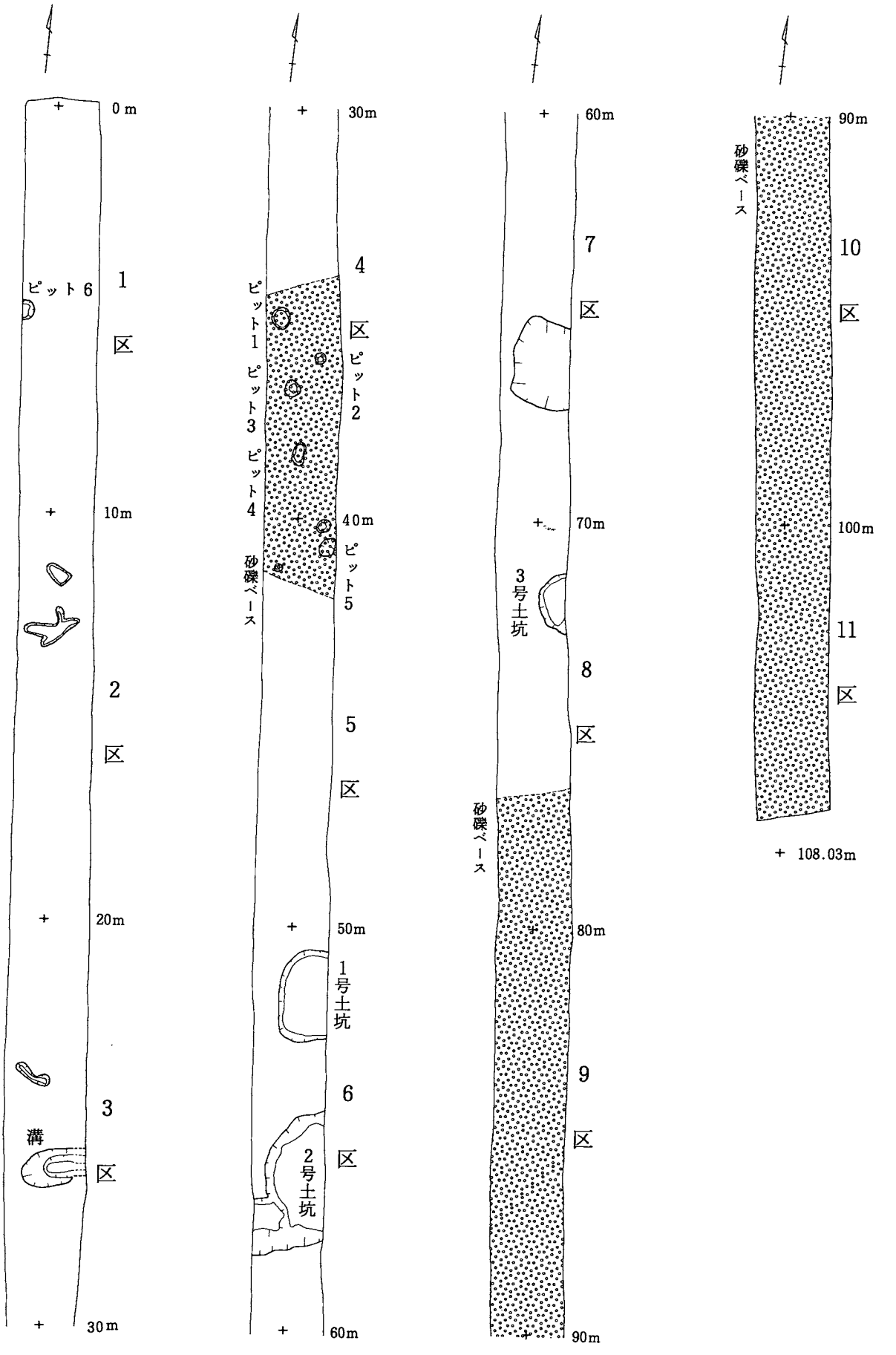
時期的には8が8世紀前半、11は8世紀後半、3・12は8世紀末～9世紀初頭、1・4～7は9世紀前半～中葉に位置付けられる。2・9・10・13～15は8世紀代に属すると思われるが細かい時期は特定できない。須恵器の産地は6・8・13・14が南加賀窯と特定される。他は能美窯か高松・押水窯のどちらかと思われるが、判断が難しい。長石を含むものが多いことから、高松・押水窯の製品が多いものと捉えておきたい。

参考遺物（第15図16～18、図版14）

地元の作業員の方が調査時に持参して下さった須恵器を紹介する。16は杯蓋、17・18は杯身で、いわゆる杯Gである。16は稜の鋭いかえしを持つ器形。焼成はきわめて良好で堅緻、色調は青灰色を呈し、胎土は緻密であるが大粒の長石？が目立って含まれる。17は口縁部内面が肥厚される器形。約1/2が残存し、口径10cm、底径8cm、器高4cmほどに復元される。16と同様の胎土・質感を持つ。17は口縁部先端を欠損する。16・17の胎土・質感に似るが、やや焼成が甘く、胎土も砂っぽい印象を受ける。16～18は時期的には7世紀後半、産地は16・17については能登の鳥屋窯と推定される。部入道地内の出土であるなら、周辺でほとんど例のない時期、産地ということになるが、出自は不明確ということなので参考資料として扱っておきたい。

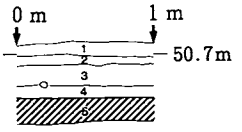
第4節　小　結

新荒屋遺跡の発掘調査で得られた遺構・遺物はごくわずかであった。遺跡は、包含層出土遺物から、奈良時代から平安時代前半にかけて時期的なまとまりを持つ集落遺跡と推定できる。検出された遺構は、伴出遺物は少ないがほとんどがこの時期に属しよう。調査区の制約から土坑、溝とも全掘できておらず、その性格については不明である。ただし、ピット1～5については遺構面をより上位に持ち、覆土も異なるため、より新しい時期、おそらく中世以降の時期と推定される。ピット3・5については柱穴となり、建物の一部を構成する可能性があろう。遺構・遺物が全般に希薄なことから、調査区は遺跡の縁辺部に相当するものと考えておきたい。



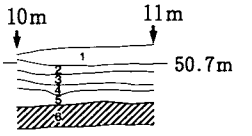
第13図　調査区実測図（1／150）

0　5 m



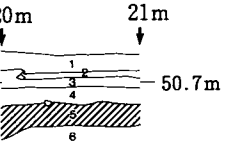
1区（0～1m）

1 耕土層
2 鉄分沈着層
3 灰色粘土層
4 濁黄オリーブ色粘質土層
（鉄分沈着し、硬質化している）
5 礫混じり明黄灰色砂質土層（ベース層）



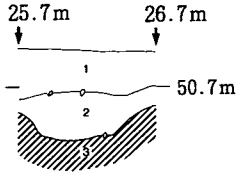
2区（10～11m）

1 耕土層
2 鉄分沈着層
3 灰色粘土層
4 濁黄オリーブ色粘質土層
（鉄分沈着し、硬質化している）
5 黄灰色砂質土層（遺物包含層）
6 灰褐色砂質土層（ベース層）



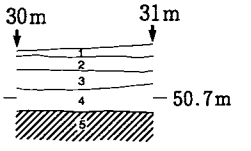
3区（20～21m）

1 耕土層
2 灰色粘土層
3 鉄分沈着層
4 灰褐色砂質土層（遺物包含層）
5 灰褐色砂質土層（ベース層）
6 砂層（ベース層）



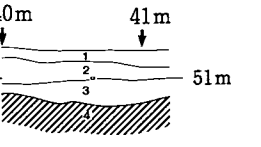
3区（25.7～26.7m）・溝

1 攪乱層
2 礫混じり灰褐色砂質土層
3 砂質土層（ベース層）



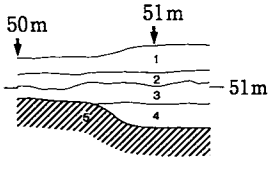
4区（30～31m）

1 攪乱層
2 灰色粘土層
3 礫混じり灰色砂質土層（遺物包含層）
4 礫混じり灰褐色砂質土層（遺物包含層）
5 ベース層



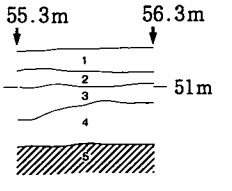
5区（40～41m）

1 攪乱層
2 鉄分沈着層・灰色粘土層
3 礫混じり灰色砂質土層（遺物包含層）
4 礫混じり茶褐色粘質土層（ベース層）



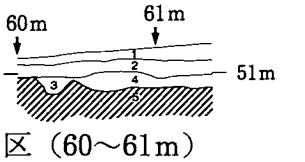
6区（50～51m）・1号土坑

1 耕土層・攪乱層
2 鉄分沈着層・灰色粘土層
3 灰褐色砂質土層（遺物包含層）
4 暗灰褐色砂質土層
5 灰褐色砂質土層（ベース層）



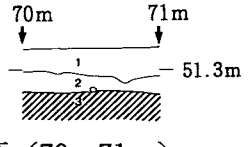
6区（55.3～56.3m）・2号土坑

1 耕土層・攪乱層
2 鉄分沈着層
3 濁灰色粘土層
4 濁灰褐色粘質土層
5 砂層（ベース層）



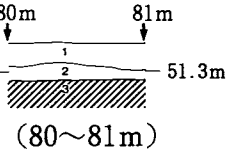
7区（60～61m）

1 攪乱層
2 暗灰褐色砂質土層（遺物包含層）
3 暗褐色砂質土層（小ピット？）
4 濁褐色砂質土層（炭粒含む）
5 ベース層



8区（70～71m）

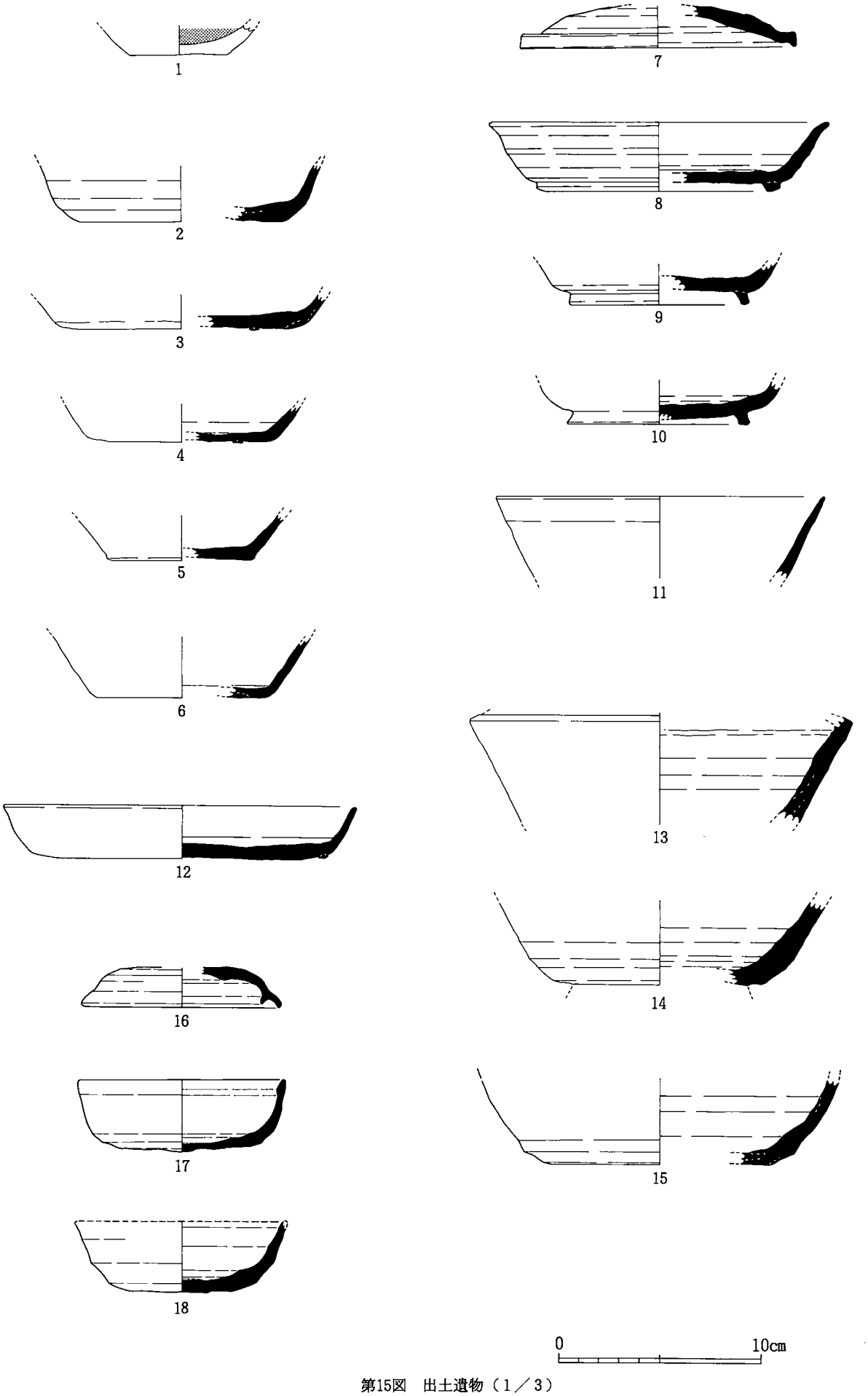
1 攪乱層
2 鉄分混じり暗灰褐色砂質土層（遺物包含層）
3 ベース層



9区（80～81m）

1 攪乱層
2 鉄分混じり暗灰褐色砂質土層（遺物包含層）
3 ベース層

第14図　調査区土層断面図（全て東壁、1／60）



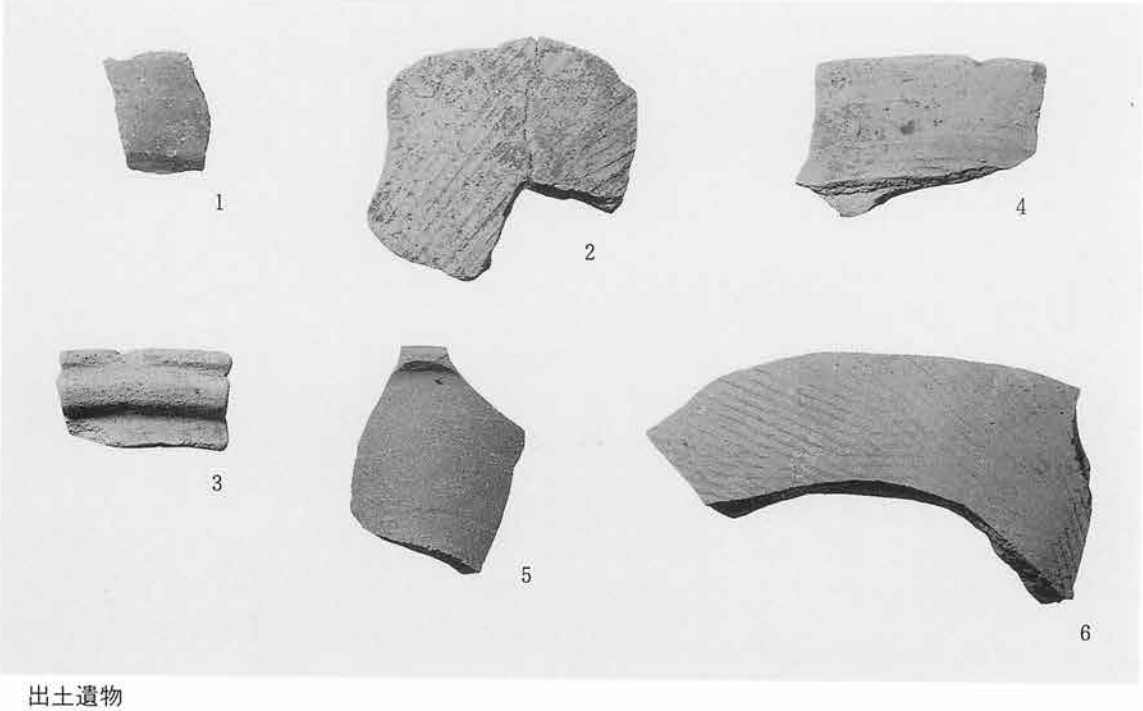
第15図　出土遺物（1／3）

写 真 図 版

遺跡遠景（西から）

第1区完掘状況（北から）

第2区完掘状況（西から）



出土遺物

表土除去作業

作業風景

1区完掘状況（西から）

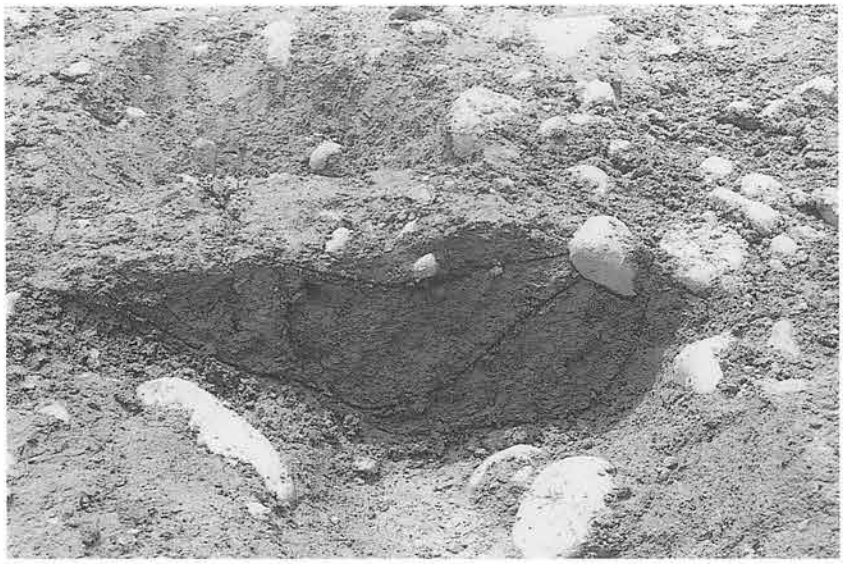
2区完掘状況（北から）

1区1号溝完掘状況（西から）

1区1号溝北壁土層（南から）

1区完掘状況（東から）

2区1号土坑（南から）



2区1号土坑土層（南西から）

2区1号溝（東から）

1号土坑（西から）

2号土坑（北から）

3号土坑（西から）

溝（東から）

ピット1～5（南から）

ピット1～5（西から）

ピット5（南から）

1～3区全景（南から）

4～11区全景（北から）

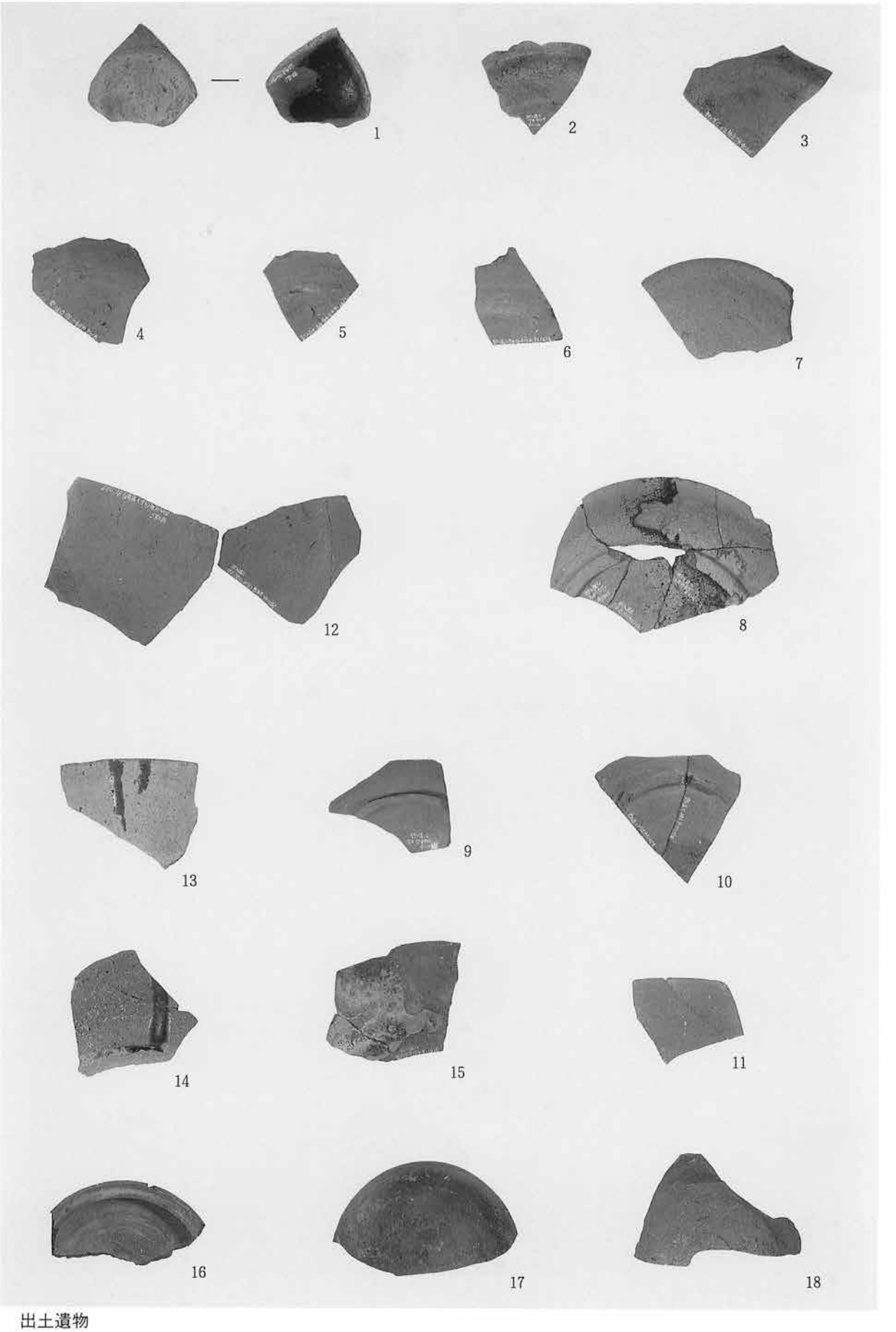
トレンチ1（南から）

トレンチ2（南から）

トレンチ3（南から）

調査区全景（北から）

調査区全景（南から）



出土遺物

鶴来北部遺跡群調査報告Ⅱ

県営圃場整備事業鶴来地区
埋蔵文化財発掘報告 2

平成 7 年 3 月 25 日　印刷
平成 7 年 3 月 30 日　発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町 4 丁目133番地
〒921　電話（0762）43－7692番

印　　刷　能登印刷株式会社